



柳沢 遊 教授

専門:近現代日本経済史

(インタビュアー:迫本・池田)

『零細企業や中小企業あるいは個人の国境を越えた進出に注目!!』

Q. 柳沢先生の専門とされている研究内容はなんですか？

つい最近慶應義塾大学東アジア研究所から、『日本帝国勢力圏の東アジア都市経済』という本を出しました。これは、東アジアの重要な都市、特に戦前の1930年代に日本が都市建設や植民地経営などに関わった都市を幾つか選びまして、若い研究者とともに共同研究して、そこに関わった企業の現地での活動、工業化の実態を調べたものです。私は中国の大連という都市について調べました。他にも瀋陽、長春や済南、青島、ソウルや開城など、東アジア都市について、4～5年間の研究成果を出した所です。何の為そういった研究をしたかといいますと、現在、アジアの都市や企業の中で戦前との繋がりがある企業もあるし、また戦前に日本の植民地支配下のもとで都市建設の基礎が作られた場所も少なくありません。そういうものに対して、日本の出先機関が、下水道なり上水道なり、大企業なり工場をどういう風に作ったか、まずキチッと事実を調べましょう。そして、こういう日本企業やインフラ設備がやがて日本の戦争を支える仕組みに転化していく訳です。日本が大東亜共栄圏を作ろうとして結局上手くいかない訳です。しかしながら、一部分の植民地や勢力圏の都市の起業家（工業経営者）はかなりの程度、日本の戦時生産力を支える役割を、果たしているわけです。ですから、日本列島だけではなくて、東アジアに広域的に展開した日本・日本企業の経済活動から、戦前と戦時の日本の帝國的膨張の関係を見て行こうというのが私の問題意識なのです。

何故そういう事をやり始めたかと言いますと、それは私自身が大学生だった時が丁度オイルショック後（1973年）にあたり、日本の軽工業の企業が東南アジアや韓国や台湾に相次いで、進出し始めていたのです。私の学生時代はそうい

う企業や人間の海外進出に関心を持っていました。現在程ではないにしろ日本の企業が国外にでていきますと、その現地で、文化や宗教、言葉、食べ物が違うという現実にあふつかる訳です。そういった問題にあふつかり合いながら、どうやって企業活動や経済活動が展開して行くのだろうかというのが、私が20代のころに抱えた問題意識だった訳です。その頃の言葉で言うと「経済の国際化」と言われていましたね。日本経済の国際化を、中小企業など個別の企業や経営者あるいは企業の従業員の生活と労働の視点から見てみようって言うのが私の研究の出発点でした。その流れは一貫してずっと今に至るまで変わっていません。そう言う事を実証研究している研究者は、今日では国際経済学等の領域の中で多いと思います。多国籍企業論を研究されている方も多いと思いますし、マルクス経済学や近代経済学の立場を超えて、企業の国境を越えた膨張とそれにとまなう諸問題について関心をもたれて研究されている方は慶應外でもたくさんいると思います。あえて、その中で私のアプローチの独自性というものは、比較的零細企業や中小企業の国境を越えた進出に注目しているという事です。東京大学や早稲田大学とかに入ってくる学生の大半は、大きな企業や名だたる大学を目指して努力してきた方が多いと思います。私の時代もそうでした。だから、私が大学に入った時に人気のあった企業（就職先でも研究テーマでも）は三井や三菱や住友などの財閥系企業や、高度成長期に急成長していた東芝、日立、日産、トヨタといったような大規模企業でした。そういう大企業に関心がない訳ではなかったですけども、私が生まれ育った東京の下町では自宅や学校の周りは商店や町工場が圧倒的に多かったのです。そのような環境で生育したという事もあってか、国民経済のなかで雇用面でおおきな役割をはたしていた零細企業・中小企業分野の研究が大学できちんと教わらないのかなと思ったのです。慶應義塾大学には工業経済論など、中小企業を専門になさっている先生が活躍されていますけども、国立大学には当時ほとんどいなかったんです。だから企業というとビッグビジネスですよ。レーニンの独占資本主義論だとか、チャンドラーの大企業組織論を学ぶのが当然という雰囲気の中で、私自身は自分の大学で学ぶ経済学や経営学に少し違和感を抱いていました。それで自分が研究をやるのであるならば、もっと中小企業の問題を歴史的なアプローチからやってみようと思ったんです。それが私の研究の第2の柱です。国内の中小企業の歴史的展開についても40代から50代になってから、論文を書くようになっていきます。第1の柱が「国際化に対する関心」第2の柱が「中小企業、

零細企業の問題」です。具体的に僕が取り上げた中小・零細企業は、日用消費財を売っている商店ですね。特に関心があったのは、高度成長期に話題になった耐久消費財（三種の神器）ではなく、日用品を取り扱う雑貨屋さん、食べ物などを取り扱う八百屋、魚屋、惣菜商店などに関心がありました。その時期の駅前商店街は、100店～400店舗ぐらい道路沿いに広範に展開している時期でした。不思議だったのです。こんなにたくさん店が並んでいて、様々な業種店が延々と「横のデパート」のように並んでいる。そこに夕方になると、ひっきりなしにお客さんが来て、色んな会話をしつつモノが買われて行く。少年、少女達も今のように学習塾に行くのではなく、なんとなく夜の町の中でぶらぶら歩いていて、商店の経営者などと話したりしている。7月と12月には商店街連合の「大売出し」がおこなわれて、盆踊り大会まで開催される。そういう地域社会の姿が私には、当時から不思議で、そこで働いている大人たちの生き生きした販売ぶりや、雑談をかわして商品を購入する主婦たちの姿が印象的でした。その風景が私は忘れられなくて、では何で400店以上も1ヶ所に集まったんだろうとか、子供たちをふくめて、人々はそこに行きながらどんな事を考えていたのだろうかとか、というのは今でも疑問に思います。

それで私は多くの若者が働いていた中小工場とか商店街の歴史を高度成長期を中心に実証的に研究しています。これは私自身の、子供時代の原風景を確かめたいし、失業者が、工員や店員に吸収されていた時代の「生存の仕組み」を知りたいという思いから始まったものです。

私の問題意識と研究は、自分自身が経験した10代、20代の地域社会の体験、そしてその体験にもとづく「日本経済イメージ」が必ずしも、大学の講義から得た経済学の学問と繋がっていなかったという反省に基づいたものです。

ゼミ生の方も2本の柱にそっている？

ゼミ生には、1990年代生まれのゼミ生としての生活感覚や成育過程がありますよね。今年のゼミの場合で言うと、地域開発とか工業開発とかという事に関心をもって、きちっと調べてもらっています。ゼミ生はゼミ生としての生きた時代との巡り合いがあり、それを大切にしてほしい。例えば、1945年に広島地域を襲った巨大な台風について調べて大変優れた三田祭論文書いている学生もいますし、山形の鶴岡市に於ける絹織物工業について丁寧に調べている学生もいます。千葉県漁村が工場地帯に変貌するなかで、どのような職業転換したか

を、行政文書に即して調査している学生もがんばっています。
私のゼミの特徴は自分の中にある「見えない大事な問題」を探し当てて、それを徹底的に歴史の研究として調べて論文として結実させるという事ですね。

『自分なりの研究テーマの研究！！』

Q. 柳沢先生の教育理念を教えてください

現代の資本主義には顧客満足主義な所があると思いますが、私のゼミは顧客満足主義からやや離れた所に存立していると思います。むしろ顧客が顧客としての「受け身性」から脱却して、一人の人間として目覚め、研究テーマを発見し、それに対して自分の感性と努力の積み重ねでオリジナルな論文を書いて行く。それを教員が暖かく見守り、時には指導し軌道修正するという形。そういうゼミですね。あえて言うならば、何でもメニューのあるアトレの高級レストランではなく、料理教室を兼ね、自分で包丁もって自分で自分らしい味付けして、みんなにたべてもらう、そのための料理素材と料理方法の知識を提供するゼミです。「いらっしやいませ」でなく、「さあ、こしらえてごらん」というわけです。

『本を読んだり、バイトをしていた学生生活でした！！』

Q. 柳沢先生の学生時代のお話を聞かせてください

今の慶應大学の学生に比べれば、日常的な勉強は不十分でした。むしろ生活のためのアルバイトに追われていました。家庭が貧しかったので、仕方なかったのですが、授業の中からきちんと出る授業を選択し、授業に出ていました。ですが、今程に語学が重要だとは理解できていなかったもので、英語はともかくとしてドイツ語を少しサボったりしました（笑）。そういう意味では中の上くらいの学業成績の学生だったとおもいます。今はそのことを深く反省しています。もっと経済学の専門課程の授業に出ておけば良かったと、大学の仕事をするほど思っています。そのかわり、暇があると岩波新書や社会科学の古典をたくさん読み、石油危機直後なので、現状についての文献も結構読みました。全部読みとおすわけではないのですが、途中まで読むでは投げ出すという中途半端な

事をしていました(笑)。いまでも、私の研究室には雑多な書籍があふれていて、大学に迷惑をかけています。

『自分なりの意識を持って社会的基盤や経済的基盤に興味のある学生』

Q 柳沢ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

自分なりの課題意識や思考をもって、あまり常識にこだわらずに、少し歴史や社会を自分の目で捉え直して見る事が出来る人です。その歴史というのは「大文字の」歴史ではなく、もっと自分の周り、地域や家族、付き合っている友達やその親にかかわる事から出発してよい。マクロな大きな歴史も大事ですが、それ以上に一人一人がどんな生き方をしてきたのか。そこの生き方のある局面で必ず経済の問題、生きるうえでの「選択」が出てくる筈ですから、その時に社会的基盤や経済的基盤は何だったのかという所に関心をもってそれを広い視野、長い時間軸の立場から文章化出来るような意欲を持った学生に来ていただきたいですね。それと、世の中の「常識的発想」にたいして、「本当はどうかかな」と疑問を持って調べたいとおもっている、すこし「好事家」的な学生も歓迎です。

『なにかひとつ、徹底的に勉強してほしい！！』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

一般教育の科目でもいいし、経済学部の設置科目でもいいので、2つないし3つを中途半端でなく、自分なりに没頭して勉強してきて欲しいですね。隅から隅まで勉強するというのが結構大事だったりします。その上で歴史や経済史をやりたくなったら柳沢研究会に来店してくださればと思います。私のゼミは、「ビブリア古書堂」のような、町並みの隅に50年間ぐらい開いている常連客の多い、良い匂いのする喫茶店兼古書店みたいなものです。スターバックスやドトールコーヒーのような人の入れ替わりもないし、賑やかさはないです。けれども、そこに来た人にコーヒーの煎り方や古い史料の見つけ方とそこから見えてくる変わった「世界」をみせてあげます。そうです、町の片隅に小さく開いている古ぼけた喫茶店のような存在だとあえてアピールしたいです。大都会の喧騒に疲れて、喫茶店をのぞいてみたい人はいつでもご来店ください。